

觀經疏と選択集

——法然淨土教の根幹——

高 橋 弘 次

一、はじめに

法然上人（一一三三―一二二二）が淨土宗を開宗されたのは、承安五年（一一七五）上人四三歳の時であったという。當時のことを法然上人は『選択本願念仏集』の最後に、

ここに於て貧道、昔この典を披閱して、粗素意を識り、立ち上り、余行を捨てて、ここに念仏に帰す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を繹とす。然る間、希に津を問うものには、示すに西方の通津をもつてし、適行を尋ぬる者には、誨うるに念仏の別行をもつてす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は少し。当に知るべし。淨土の教え、時機を叩きて、行運に当るなり。念仏の行、水月を感じて、昇降を得たり。

と述べておられる。

「貧道（法然上人自身の謙遜語）、昔この典（『觀經疏』をいう）を披閱して」とは、法然上人が源信の『往生要集』に導かれて、善導大師（六一三―六八一・以下敬称を略す）の『觀無量寿經疏』（以下『觀經疏』という）に出会った時のことである。そして「それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を繹とす」というのである。善導の『觀經疏』において「念仏の教え」を発見・確信して、淨土開宗して以來は、自らも念仏を修し他に誨えるのも念仏であったというのである。

法然上人のこの經緯を法弟・二祖聖光房弁長（一一六二―一二三八）は『徹選択本願念仏集』上に、

善導和尚の觀經の疏に、一心專念弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念念不捨者 是名正定之業 順彼仏願故とい

える文を見得るののち、われらがごとき無智の身は、ひとえにこの文をあおぎ、もはらこのことわりをたのみ、念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなうれば、ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、亦あつく弥陀の弘願に順ず。順彼仏願故の文たましいにそみ、心にとどまるのみ。⁽²⁾と、伝えている。

法然上人は善導の『観経疏』（散善義）によって、浄土宗を開宗したのであるが、以来法然上人は「偏に善導一師に依る」（『選択集』第十六章）と表明され、この姿勢を崩すことなく貫かれたのである。『無量寿経』を解釈するときも巻頭に「正に善導に依り、傍に諸師に依つて愚懷を述ぶ」⁽³⁾とあり、『観無量寿経』を解釈するときも巻頭に「諸師の解釈多しと雖も、今は則ち正しく善導に依り、傍に余師の釈をもつて善導を補助す」⁽⁴⁾とあり、また『阿弥陀経』を解釈するときも文中に「経（浄土三部経）の主旨、念仏の深義に至つては、専ら善導和尚をもつて、用いて依憑とす」⁽⁵⁾とある。いうならば「浄土三部経」の解説は善導の解釈によるべきで、勝手な解説は許されない、という姿勢である。

こうした法然上人の姿勢によって、わが国の念仏の教え（浄土教）は成立するのであるが、それは善導の『観経疏』をほかにして、わが国の浄土教、今日の法然上人の浄土宗も、証空上

人（一一七七―一二四七）の西山浄土宗も、親鸞聖人（一一七三―一二六二）の浄土真宗もありえなかった、ということがいえる。

二、善導の著作

善導の著作は現存するものを五部九巻と呼んでいる。

一、『観無量寿仏経疏』（略称『観経疏』『四帖疏』など）四巻、後に解説する。

二、『転経行道願往生浄土法事讃』（略称『法事讃』）二巻。浄土三部経のなかの『阿弥陀経』を誦誦することを中心にして、仏像の周辺を廻り、散華をし讃歎をし、罪過の懺悔をし礼拝・念仏していく宗教儀礼を明らかにしたもの。

三、『観念阿弥陀仏相海三昧功德法門』（略称『観念法門』）一卷。『観無量寿経』や『般舟三昧経』などの經典により、観仏三昧や念仏三昧の実践をし、また多くの經典を引用し、自らのあらゆる罪過を告白懺悔する行法を明らかにしたもの。

四、『願往生礼讃偈』（略称『往生礼讃』『六時礼讃』）一卷。一日を六時に分けて、阿弥陀仏を讃歎し礼拝・懺悔する。讃歎する内容は、日没―『無量寿経』の十二光仏名、初夜―『無量寿経』の東方諸仏国の偈（往観偈）、中夜―竜樹の

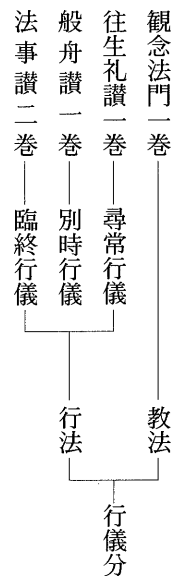
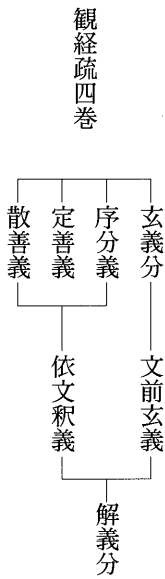
「十二礼偈」、後夜―天親の『往生論』、晨朝―隋の彦琮の『願往生礼讃偈』、日中―『観無量寿経』によって作られた十六観偈、この日中には「広懺悔」という懺悔文が入っている。

五、『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（略称『般舟讃』）一卷。

七日あるいは九〇日の修行期を定めて、仏像の周辺を行道しつづけて、浄土を讃歎し礼拝して心を浄土の一境に注いで観仏をこころざす。ただこの讃歎は『般舟三昧経』によるものでなく『浄土三部経』によった信仰讃歎といえる。

この善導の五部九巻の著作について、従来、浄土の教義（思想）を明らかにしていく解義分と、実践・行儀作法を明らかにしていく行義分とに分ける。

五部九巻



善導はこのほかに『弥陀経義』⁽⁶⁾（『弥陀義』とも称す）、『念佛集』、『大乘布薩法』などの著作のあったことが伝えられているが現存しない。また善導は『観念法門』のなかに「もし、人ありて観経などによりて、浄土莊嚴の変（浄土変相図・観経曼陀羅）を畫造して、日夜に宝池を觀想すれば、現生に念念に八十億劫の生死の罪を除滅す」と述べているように、善導は浄土変相図の制作を試み、それによって浄土觀想の実践をしていたことが知られている。また善導の伝記には「畫するところの浄土変相・三百堵（壁）」⁽⁸⁾とあるなど、善導が浄土変相図・観経曼陀羅の制作につとめていたことは事実のようである。⁽⁹⁾

三、『観経疏』撰述の理由

善導は、人間だれもがわけなく救われる教えを、苦悩し求め続けているときに、山西省の南西にある山寺・石壁山玄中寺において、『観無量寿経』の教えにしたがって、念佛を実

踐修行している道綽禪師（五六二―六四五）に出会ったのである。道綽は『観無量寿経』の註釈書ともいべき『安樂集』二巻を著し、阿弥陀仏の名号を称念して、西方浄土に往生する教えを實踐し弘通していたのである。

『続高僧伝』（卷二〇）¹⁰によれば、道綽は『涅槃経』の研鑽につとめていたが、その後、汶水の石壁谷玄中寺にいたり、寺内の石碑に曇鸞の事跡が刻されているのを見て私淑して、ついに浄土教の人となった、と記されている。どこまでも庶民の救われる宗教を求めていたのである。善導も早くから『観無量寿経』を信仰し、念仏の行をつんでいたのであるが、道綽の『観無量寿経』の講説を聞くにおよんで、一層啓発され念仏信仰に確信を持ったものと思われる。そこで善導自身も『観無量寿経』の真意を明らかにすべく、『観経疏』の撰述におよんだのである。

法然上人のあとを継いだ二祖弁長は、善導が『観経疏』四巻を撰述する理由を『浄土宗要集』¹¹に、「善導、観経について疏を造りたもうこと、その由来なきにあらず。故にその因縁、弁阿（弁長）これを然師上人（法然）に伝えたてまつるに三義あり。一つには有縁の経なるが故に、二つには相伝の経なるが故に、三つには三昧発得の故に。」とある。まず「有縁の経」というのは、善導が自らの救いをこの經典に求めたことをいい、つぎの「相伝の経」というのは、善導が道綽に出会ってこの経

典の相伝を受けたことをいい、最後の「三昧発得」というのは、善導がこの經典の教えによつて三昧発得したということである。こうした深いかわりのある經典であるという理由から、善導は『観経疏』の撰述にいたしたのである。

いま一つの理由は、善導以前に、地論宗の浄影寺の慧遠（五二二―五九二）の『観無量寿経義疏』二巻、天台宗の智顗（五三八―五九七）の『観無量寿仏経疏』二巻（偽撰ともいわれている）、三論宗の嘉祥寺の吉蔵（五四九―六二三）の『観無量寿経義疏』一巻、あるいは師僧道綽の『安樂集』二巻など、当時の一流の学匠が『観無量寿経』についての註釈書を著しており、これらの註釈書は、いずれも『観無量寿経』に説き示されている真意を開頭していないという善導の不満が『観経疏』の撰述にいたらしめたのである。

善導はこうした先輩学匠の著した『観無量寿経』の註釈書に對して不満をいだき、これらの註釈書をしりぞけて、『観無量寿経』の真意を開頭すべく、師僧道綽の『安樂集』二巻に影響をうけながら、『観経疏』の撰述にいたったと思われる。善導が『観経疏』（散善義）の最後に「今この観経の要義を出して、古今を楷定せんと欲す」¹²とあるのは、これまでの『観経』についての註釈書をしりぞけて『観経』の真意の開頭につとめることを表明したものである。古くからこの『観経疏』を『古今楷定

之疏・『楷定之疏』と呼ばれているのは、善導による『観経』の真意の開顯につとめる『観経疏』撰述の理由によるものである。

四、『観経疏』撰述の立場

善導は人間だれもがわけへだてなく救われていく凡入報土の教えを、『観無量寿経』のなかに見出し、この教えを『観経疏』において組織し体系づけていくのである。しかし善導は、『観無量寿経』を説かれた釈尊の真意にかなうかどうか、仏の照鑑をたのみ、靈験を請うて、その証明とするのである。

善導は『観経疏』（散善義）のおわりに、つぎのように記している。

もし三世の諸仏・釈迦仏・阿弥陀仏等の大悲の願意にかなわば、願わくは夢中において、上の所願のごとき一切の境界の諸相を見ることを得せしめたまえ、と。仏像の前において願を結しおわつて、日別に阿弥陀経を誦すること三べん、阿弥陀仏を念すること三万べんにして、至心に発願す。すなわち当夜において見らく、西方の空中に上のごとき諸相の境界、ことごとくみな顯現す。——中略——すでにこの相を見て、合掌して、観ずることやや久しうしてすなわ

ち覚む。覚めおわつて欣喜にたえず。ここにすなわち義門（教え）を条録す。これより已後、毎夜夢中につねに一僧ありて、来りて玄義科文を指授したもう。すでにおわればさらに見えたまわす。⁽¹³⁾

と。善導がこうした深い宗教経験のなかで『観経疏』を撰述したということは、『観経疏』はたんに『観無量寿経』の文字の解釈に終わっていないことを表明したものといえる。したがって善導は、この『観経疏』を書きおわつて、

後時に脱本しおわつて、またさらに至心に七日を要期して、日別に阿弥陀経を誦すること十べん、阿弥陀仏を念すること三万べん、初夜後夜に彼の仏国土の莊嚴等の相を觀想して、誠心に歸命すること一^{もつぱ}ら上の法のごとくする。——中略——願わくは、含靈（衆生）をしてこれを聞きて信を生じ、有識（衆生）の觀^みんものをして西（浄土）に歸せしめんことを。この功德をもつて衆生に回施す。ことごとく菩提心を發^はし、慈心をもてあい向い、仏眼をもてあい見て、菩提まで眷屬し、眞の善知識となり、同じく淨国に歸し、共に仏道を成ぜん。この義すでに証^{あかし}を請うて定めおわんぬ。一句一字も加減すべからず。写さんと欲するものは、もっぱら經法のごとくせよ。まさに知るべし。⁽¹⁴⁾とある。

善導は、『観無量寿経』の真意を開顕しえたのはたんに文字の解釈によるのではなく、仏の指授によるものである、というのである。そこで「一句一字も加減すべからず」といい、「もっぱら経法のごとくせよ」というのは、『観経疏』がたんなる解釈におわらず、『観経疏』をして「証定之疏」と呼ばしめる所以のものである、というのである。

このことについて法然上人は、『選択本願念仏集』のおわりに、静かにおもんみれば、善導の観経疏は、これ西方の指南行者の目足なり。然ればすなわち西方の行人は、かならずすべからく珍敬すべし。なかについて毎夜夢中にありて玄義を指授す。僧はおそらくはこれ弥陀の応現ならん。しからばいうべし。この疏（観経疏）はこれ弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐に相伝えていわく、善導はこれ弥陀の化身なりと、しからばいうべし。またこの文（観経疏）はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲するものは、もはら経法のごとくせよといえり。この言は誠なるかな。⁽¹⁵⁾と述べているのである。

このように法然上人は、この善導の『観経疏』を、まさに「弥陀の伝説」、「弥陀の直説」とまでいって、尊重すべきことを強調されているのである。

五、『観経疏』の特色

善導の『観経疏』は、わが国では古くから『古今楷定疏』^{ここんかいじょうのしよ}あるいは『楷定疏』と呼ばれている。それは善導みずからも「某、^{それがし}今、この観経の要義を出して、古今を楷定せんと欲す」（散善義）と述べているように、観経についての従来の解釈をしりぞけて、独自の解釈を打ち出したのである。従来の解釈とは、慧遠の『観無量寿経義疏』二巻、智顗の『観無量寿仏経疏』二巻、吉蔵の『観無量寿経義疏』一卷などの解釈であるが、善導はこの諸師の解釈に対して不満をいだき、これを否定して独自の解釈をほどこしたのである。

一、観経に説き示される内容を、諸師は観仏三昧を説く經典としたが、善導は観仏三昧と念仏三昧を説く、一経両宗の經典とした。

二、観経に説かれる十六観を、諸師は定善（定機に説かれる教え）とし、三福（世福・戒福・行福）を散善（散機に説かれる教え）とし、定散ともに韋提希の要請によって説かれたとした。しかし善導は十三観までを定善とし、後三観（三福九品）を散善とし、十三観の定善は韋提希の要請によつて釈尊が説かれたのであり、三福九品の散善は釈尊が自ら説かれた教えであるとした。

三、諸師の解釈によるならば、観經に説かれる教えは聖者を中心とした教えであり、九品に説かれる教えも、聖者と凡夫に通ずるものであり、阿弥陀仏の身土も応身・応土であるとした。したがってその浄土は聖者も凡夫も同居する浄土（凡聖同居土）とみたのである。しかし善導は、阿弥陀仏とその浄土を報身・報土とし、凡夫が往生するのはまさしく報土（凡入報土）であると強調したのである。

四、観經に説かれる九品の区別を、諸師は各品ごとの機類や証果によって、聖者と凡夫の両者にかかわる区別と解釈したのに対して、善導は九品のすべてが凡夫（九品皆凡）であるとした。上品は大乘に遇った凡夫、中品は小乗に遇った凡夫、下品は惡に遇った凡夫であるとした。

五、安心（三心）・起行（五種正行）・作業（四修）の実践項目をたてて、これを体系的に論じたのは善導である。諸師の安心・起行についての解釈は判然としないのであるが、善導はこれを強調する。とくに観經に説かれる三心（至誠心・深心・廻向発願心）は、阿弥陀仏の浄土に往生を求めるものの正因としてこれを認め、浄土往生を求めるものの信心の内容（二種深信）をも説明する。また廻向発願心については、念仏実践者の信仰のあり方（二河白道の譬喩）をも明らかにする。なおこの三心を諸師が上三品の

心のあり方と解釈するのに対して、善導は九品に通ずるとし、定善（十三観）の実践においてもこれが必要とする。

六、観經に説かれる三心を解釈するなかで、とくに深心（深信）を確立する行として、五種正行をあげる。正行とは誦・觀・禮・稱・讚・歎・供・養の五種であり、善導はこの五種の正行のなかの第四の称名正行を正定業とし、他の四正行を助業とするのである。「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行・住・坐・臥に、時節の久近を問わず、念念に捨てざる、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に。」とあるのは、この称名正行・正定業の説明である。

七、凡夫が往生する浄土を、諸師は應土とするが善導は報土であると強調した。しかもその浄土は西方の方角にあるとし、具体的な様相をもつ浄土とした。それは観經の第八像想觀を説明するなかで、善導は「また今この觀門等はただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総て無相離念を明かさず。如来懸知したまう末代罪濁の凡夫は、相を立てて、心を住するすら、なお得ること能わじ。何にいわんや相を離れて事を求めば、術通なき人の空に居して舍を立んがごとしと。」といい、指方立相の浄土觀を強調した。八、善導は観經疏（散善義）の終りのところで、阿弥陀仏の名号を阿難に付屬して、「上来、定散兩門の益を説きたま

うといえども、仏の本願に望^{のぞ}むれば、意^{こころ}、衆生をして一向に専ら弥陀^{みだ}仏の名を称せしむるに在り。」と記している。これは称名念仏を諸師が下三品に限るとしたのに対して、善導は九品に通ずとしたものである。さらにいえば、観經に定善・散善の教えが説き示されているが、中心的教説はどこまでも称名念仏にあることを強調した。

六、『観經疏』の伝来

善導の生存した初唐の時代は、わが国の留学僧もさかんに入唐・留学していた時であり、日唐交流貿易もおこなわれており、当時、観經の浄土変相図や善導の著作もわが国に多く持ち帰られたことは充分に推測されることである。⁽¹⁶⁾ 聖徳太子の法隆寺に極楽浄土の壁画が残り、太子のために天寿国繡帳が造られ、天平の盛期（天平宝字七年＝七六三）には、当麻寺の浄土大変相図、つまり当麻曼荼羅が造られ、これが善導の『観經疏』の特色ある説相に合致することが指摘されている。⁽¹⁷⁾

善導の著作がわが国の天平写經に書写されていることは早くから知られていることである。⁽¹⁸⁾ つまり善導の著作のほとんどが、天平年間にわが国に将来され書写されていたということである。観經疏、西方法事讃、往生礼讃、六時行道、般舟讃など

であり、善導の五部九巻といわれている著作のほとんどである。これらの著作が、わが国の奈良・平安時代の仏教思想にどれほどの影響をあたえたか、⁽¹⁹⁾ ここで詳しく論及することはできない。

比叡山の浄土教の祖師、源信の『往生要集』、源隆国と延暦寺阿闍梨による『安養集』、さらに永観の『往生拾因』など、法然上人以前の浄土教祖師の著作のなかに、善導の著作が介在して、大きくその思想的影響をあたえていることは否定しがたい事実である。法然上人が善導の『観經疏』の文に出会ったのも、源信の『往生要集』のなかに引かれている善導の『往生礼讃』の「念念相續して畢命を期とするものは、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」⁽²⁰⁾ とある文によって、善導の『観經疏』に近づいていったものと思われる。

七、『選択集』と善導の著作

法然上人が主著『選択集』を撰述するにあたって、いかに善導の解釈によったか、についてはすでに論じた。そこで『選択集』各章・全体の構成（引文）を図示するとつぎのようになる。

選撰本願念仏集
南無阿弥陀仏 往生之業
念仏為先

第一章（聖道浄土二門篇）

安樂集

第二章（捨雜行帰正行篇）

觀經疏散善義
往生礼讃

第三章（念仏往生本願篇）

無量寿經
觀念法門
往生礼讃

第四章（三輩念仏往生篇）

無量寿經

第五章（念仏利益篇）

無量寿經
往生礼讃

第六章（末法万年特留念仏篇）

無量寿經

第七章（光明唯撰念仏行者篇）

觀經疏定善義
觀念法門

第八章（三心篇）

觀經疏散善義
往生礼讃

第九章（四修法篇）

往生礼讃
西方要決

第十章（化仏讚歎篇）

觀經疏散善義
無量寿經

觀經疏と選撰集

觀經撮要

大經撮要

第十一章（約対雜善讚歎念仏篇）

觀經疏散善義
無量寿經

第十二章（付属仏名篇）

觀經疏散善義
無量寿經

第十三章（念仏多善根篇）

阿弥陀經
法事讃

第十四章（六方諸仏唯証誠念仏篇）

觀念法門
法事讃
往生礼讃
觀經疏散善義
浄土五会法事讃

第十五章（六方諸仏護念篇）

觀念法門
往生礼讃

第十六章（以弥陀名号付属舍利弗篇）

阿弥陀經
法事讃

（各章の篇目は『決疑鈔』によるものである）

小經撮要

觀經撮要

右の図示によつて見ても、『選撰集』の構成は教証として無量寿經・觀無量寿經・阿弥陀經の浄土三部經を中心とするものであるが、解釈についてはその大方が善導の著作によつてゐることが分る。第一章の『安樂集』（道綽）、第九章の『西方要決』（窺基）、第十四章の『浄土五会法事讃』（法照）をのぞいて、大方の各章は善導の著作によつて解釈がほどこされている。とく

に第二章「捨難行帰正行篇」（起行）と第八章「三心篇」（安心）とは、引文・私釈など全文が善導の著作（解釈）から論述されている、とみてよい。

八、『選択集』と『観経疏』

ここで『選択集』十六章段の各章における善導の『観経疏』を中心とする著作にかかわる内容を記述する。

第一章（聖道浄土二門篇）は、善導を浄土教に帰入させた道綽（五六二―六四五）の観無量寿経を註釈した『安樂集』によっている。法然上人は「偏依善導一師」といつても、この第一章の教判は、善導の教判（二藏二教判）によらず、道綽の聖浄二門判によっている。仏教を大きく聖道門と浄土門とに分ける聖浄二門判は、仏教を教理の浅深によって客観的に判別していく従来の教相判釈ではなく、実践の成否による主体的な価値観に立つて判別された教判（教えの価値判断）である。いわば実践の成否に立つての仏教の新しい教判が聖浄二門判である。こうした新しい教判によって、よるべき教え（浄土門）を明確にしているのが、この『選択集』第一章である。この章は善導の著作にかかわるところがないのである。

第二章（捨難行帰正行篇）は、浄土門の教えに帰入すること

が明確になったうえは、いかなる行（実践）を修すべきかを明らかにする。それは善導の『観経疏』（散善義）に浄土に往生を求める行に正行（五種正行）と雑行（正行を除いた行）との二つがあるが、いまはただ阿弥陀仏にかかる純一無雑の正行によるべきとする。その正行とは、(1)読誦正行Ⅱもつばら無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経を誦すること。(2)觀察正行Ⅱもつばら阿弥陀仏とその浄土の莊嚴に心をそそぎ、觀察し憶念すること。(法然上人はこの觀察を欣慕する心として捉えるⅡ「三心料簡」)。(3)礼拝正行Ⅱもつばら阿弥陀仏を礼拝すること。(4)称名正行Ⅱもつばら阿弥陀仏の名号を称えること。(5)讚歎供養正行Ⅱもつばら阿弥陀仏を讚歎し供養することである。

この五種正行こそは阿弥陀仏とそれを修す人びと（衆生）にとって親近しているから正行とされ、ほかの行は阿弥陀仏にとつて疎雑の行であるから雑行とされる。さらにこの五種正行のなか(4)の称名正行こそは阿弥陀仏の本願の行であるから正定業とされ、ほかの四つの正行は正定業（称名正行）を助成する行であるから助業とする。そこで雑行をすてて正行を修し、なかでも阿弥陀仏と直接的に呼応関係をもつ正定業を修すべきことを明かすのが第二章である。

なお正行と雑行の区別を五番の相對において展開させるが、これがまた善導の『観経疏』によっている。⁽²¹⁾

五番相對

親疎對……………觀經疏の定善義
近遠對……………觀經疏の定善義
有間無間對……………觀經疏の散善義
廻向不廻向對……………觀經疏の玄義分
純雜對……………善導和尚の意、しばらく浄土の
行において純雜を論ずる。

さらに法然上人は善導の『往生礼讃』によつて雜行を修するものの十三の失をあげている。⁽²²⁾

(1)雜縁亂動して正念を失する。(2)仏の本願と相應しない。(3)教と相違する。(4)仏語に順じない。(5)係念相續しない。(6)憶想間斷する。(7)廻願懇重真実とならない。(8)貪瞋諸見の煩惱來たりて間斷する。(9)慚愧懺悔の心が無い。(10)相續して仏恩を念報しない。(11)心に輕慢を生じて、業行をなしても常に名利と相應する。(12)人我自ら覆うて、同行善知識に親近しない。(13)雜縁に近づき、往生の正行を自障障他する。

第三章(念仏往生本願篇)は、『無量寿經』の「第十八願・念仏往生願」の文を善導が『觀念法門』で、

もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が国に生ぜんと願じて、我が名字を称すること、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、もし生ぜずば正覺を取らじ。⁽²³⁾

とよみ、さらに『往生礼讃』で、

もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名字を称すること、下十声に至るまで、もし生ぜずば正覺を取らじ。彼の仏、今現に世に在して成仏したまえり、まさに知るべし。本誓の重願虚しからず。衆生、称念すれば必ず往生することを得。⁽²⁴⁾

とよんでいる。とくに後者に『往生礼讃』の文(四十八文字・漢文)を法然上人は尊んだようである。

そして法然上人は、仏の願には總願(仏教共通の四弘誓願)と別願(阿弥陀仏の四十八願)とがあり、末代の凡夫・衆生が救われるのは、別願中の第十八願・念仏往生の願の称名念仏によつてであることを明らかにしている。また称える名号には仏の内証・外用の功德が含まれており(万徳所帰)、その名号を念ずるのではなく声に出すことによつて(念声是一)、往生(救い)がなしとげられることを述べているのが、この第三章である。

第四章(三輩念仏往生篇)は、『無量寿經』に浄土往生を求める人びとを三種(三輩Ⅱ上輩・中輩・下輩)にわけて、それぞれの修行(諸行)が説かれているが、唯一絶対の行は称名念仏であることを、廢立・助正・傍正の論理でもつて論証している。つまり諸行が説かれるのは、およそ三つの意味(三義)がある。その一つは諸行を廢して念仏の一行に歸せしめるため、

その二つは念仏を助成するために諸行が説かれ、その三つは念仏にも諸行にも、修する人びとにそれぞれ三種（三輩）の別のあることをあらわすために、諸行を説くというのである。

法然上人はこの三義（廃立・助正・傍正）について、つぎのようにいう。

およそかくのごとき三義、不同有りと いえども、ともにこれ一向念仏の爲にする所以なり。初めの義は、すなわちこれ廃立の爲に説く。謂く諸行は廢の爲に説き、念仏は立の爲に説く。次の義は、すなわちこれ助正の爲に説く。謂く念仏の正業を助けんが爲に諸行の助業を説く。後の義は、すなわちこれ傍正の爲に説く。謂く、念仏諸行の二門を説くといえども、念仏を以て正と爲し、諸行を以て傍と爲す。故に三輩通じて皆念仏と云うなり。ただしこれ等の三義、殿最知り難し。請う、諸の学者、取捨心に在るべし。今もし善導に依らば、初めを以て正と爲すのみ。⁽²⁵⁾

このように法然上人は三義を論じるのであるが、それは善導の『觀經疏』〔散善義〕に「上來定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして、一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」⁽²⁶⁾と説いている立場からいうならば、三義の中心は廃立にあつたことを明かすのが、この第四章である。

第五章（念仏利益篇）は、念仏には諸行によつてえられない

利益・功德のあることを明かし、さらに念仏は阿弥陀仏の選んだ唯一の行であるから一念の念仏においても無上の功德のあることを強調する。そこで「且く善導の一意に依つてこれを謂わば、⁽²⁷⁾原ぬるにそれ仏意は、正直にただ念仏の行を説かんと欲すといえども、機に随つて、一往、菩提心等の諸行を説いて、三輩の浅深不同を分別す。然るに今諸行においては、すでに捨てて歎ぜず、置いて論ずべからざる者なり。ただ念仏の一行に就いて、すでに選んで讚歎したまう。思つて分別すべき者なり」と、法然上人は善導の一意によつて、念仏の無上大利を強調する。これが第五章である。

第六章（末法万年特留念仏篇）は、『無量寿經』に「⁽²⁸⁾当來の世に經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍をもつて、特りこの經を留めて、止住すること百歳ならん。それ衆生ありてこの經に値はんものは、意の所願に隨いて皆得度すべし。」とある文にもとづいて、念仏の教えの永遠性を強調している。法然上人は善導の『往生礼讃』の文に「万年に三宝滅せんに、この『經』、住すること百年ならん。その時間いて一念せば、皆まさにかしこに生ずることを得べし。」⁽²⁸⁾とあり、また『法事讃』に「弘誓多門にして四十八なれども、偏に念仏を標して、最も親しとす。人能く仏を念ずれば、仏また念じたまう。専心に仏を想えば、⁽²⁹⁾仏人を知りたまう。」とある文によつて、念仏の教えの真实性

と永遠性を論じているのが、この第六章である。

第七章（光明唯摂念仏行者篇）は、『観無量寿經』に、「無量寿仏（阿弥陀仏）に八万四千の相あり。一一の相におのおの八万四千の随形好あり。一一の好にまた八万四千の光明あり。一の光明、徧く十方の世界を照して、念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」とある文にもとづいて、阿弥陀仏の慈悲の光りは、念仏の人を照らしてはぐくみ救うことを強調している。

そこでこの光明撰取について、善導の『観經疏』（定善義）の解釈に、

問うて曰く、つぶさに衆行を修して、ただ能く回向すれば、皆往生を得。何を以てか、仏光普く照らすにただ念仏の者のみを撰する、何に意有るや。答えて曰く、これに三義有り。一に親縁を明す。衆生、行を起して口常に仏を称すれば、仏すなわちこれを見たまう。身常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず。故に親縁と名づく。二に近縁を明す。衆生仏を見んと願すれば、仏すなわち念に應じて目前に現在す。故に近縁と名づく。三に増上縁を明す。衆生称念すれば、すなわち多劫の罪を除く。命終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら来つて迎接した

まう。諸邪業繫、能く礙うる者無し。故に増上縁と名づく。自余の衆行も、これ善と名づくといえども、もし念仏に比すれば、全く比較に非ず³⁰⁾。

という、仏と念仏する人とのかわりを三縁（親縁・近縁・増上縁）で明らかにする。これが第七章である。

第八章（三心篇）は、『観無量寿經』に、「もし衆生有つて、彼の国に生ぜんと願う者は、三種の心を発して、すなわち往生す。何等をか三とす。一は至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。三心を具する者は、必ず彼の国に生ず」とある文にもとづいて、念仏するものの心のもち方、安心を明らかにしている。とくにこの三心については、善導の『観經疏』（散善義）³¹⁾における解釈に依っている。

一 至誠心とは、真実心のことであり、念仏するものはこの真実心にもとづかなければならない。外には誠実らしくみせかけ、内には虚偽にみちている、といった心では往生できないというのである。二 深心とは、深く信ずる心であり、これに二種（二種深信）あるという。一つには自らの罪障深きことを自覚し、自分は出離（救い）の縁のないことを信ずる（信機）ことであり、二つには阿弥陀仏の本願（聖意）によって必ず救われることを信ずる（信法）ことである。信仰にはこうした背反し矛盾する心の要素があり、この相反する自覚（信機と信法）が

あつて、はじめて真実の信仰が生まれるのである。三回向発願心とは、往生を求めるためにはすべての善根功徳をふりむけて、浄土に往生することを求める心である。

念仏するものはこうした三つの心を具えなければならぬといふのであるが、これは上品上生のところで「往生の正因」として善導は解釈する。しかしこれは九品に通じ、さらに定善（観仏）にも通ずる心構えとして、善導は強調している。法然上人は善導の『観経疏』の三心の解釈につづいて、さらに善導の『往生礼讃』⁽³²⁾における三心の簡潔な説明をあげている。なお『観経疏』における三心の回向発願心の解釈のなかに、念仏する人の信仰のあり方として「二河白道」のたとえが示されている。これが第八章である。

第九章（四修法篇）は、念仏生活をおくるための四つの態度（四修）を明らかにしている。それは善導の『往生礼讃』⁽³³⁾に示されている。(1)恭敬修Ⅱおごりたかぶる心を静めて、仏の前に自分をむなしくして、うやまいの心をもつこと。(2)無余修Ⅱ称名念仏の一行を修し、ほかの行（雑行）をまじえないこと。(3)無間修Ⅱ専ら称名念仏を修し、ほかの行をもつて間断しないよう精進すること。(4)長時修Ⅱ中断することなく一生涯おわるまで称名念仏を修すること。この四修法を明らかにしているのが、この第九章である。

第十章（化仏讃歎篇）は、『観無量寿経』の聞経と念仏について、文を、善導の『観経疏』⁽³⁴⁾に「聞く所の化讃、ただ称仏の功を述べて、我れ来つて汝を迎うと、聞経の事を論ぜず。然るに仏の願意に望むれば、ただ正念に、名を称することを勧む」とある解釈によつて、法然上人は本願の行（念仏）と非本願の行（聞経）とを区別し、化仏が本願の行・念仏を讃歎し来迎することを明らかにしている。これが第十章である。

第十一章（約対雑善讃歎念仏篇）は、『観無量寿経』に、「もし念仏せん者、まさに知るべし、この人はすなわちこれ人中の芬陀利華なり。観世音菩薩、大勢至菩薩その勝友と為る。まさに道場に坐し諸仏の家に生るべし」とある文について、善導が『観経疏』に、念仏する人を人中の芬陀利華（pundarikā 白蓮華）というのは「人中の好人・妙好人・上上人・希有人・最勝人」であるとしている。これによつて法然上人は「ただ念仏の力のみ有つて、能く重罪を滅するに堪えたり。故に極悪最下の人、の為に極善最上の法を説く」といい、さらに「また念仏する者は、命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。およそ五種の嘉譽（人中の芬陀利華）を流^うえ二尊（釈尊と阿弥陀仏）の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また浄土に往生して乃至成仏す。これはこれ当益なり」といつて、念仏するものを讃歎していく。これが第十一章である。

第十二章（付属仏名篇）は、『観無量寿經』に、「仏阿難に告げたまわく、汝好くこの語を持て。この語を持てとはすなわちこれ無量寿仏の名みなを持てとなり。」とある文を、善導は『観經疏』に「仏告阿難汝好持是語より已下は、正しく弥陀の名号を付属して、けだ遷代に流通することを明す。上來定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。」と解釈している。

この善導の解釈にもとづいて法然上人は、

今また善導和尚諸行を廢して念仏に歸せしむる所以は、すなわち弥陀の本願たるの上、またこれ釈尊付属の行なればなり。故に知んぬ。諸行は機に非ず、時を失えり。念仏往生は機に当り、時を得たり。感応とうえんあに唐捐ならんや。まさに知るべし。随他の前には暫く定散の門を開くといえども、随自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉じざるはただこれ念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、意ここに在り、行者まさに知るべし。³⁵

と結論づけるのである。これが第十二章である。

第十三章（念仏多善根篇）は、『阿弥陀經』に、「十善根福德の因縁を以て、彼の国に生ずることを得べからず。舍利弗、もし善男子、善女人有つて、阿弥陀仏を説くを聞いて、名号を執持することもしは一日くもしは七日、一心不乱なれば、その人

命終の時に臨んで、阿弥陀仏諸の聖衆とともに、その前に現在したまう。この人終る時、心顛倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極樂国土に往生することを得。」とある文を、善導の『法事讃』における解釈によつて、念仏の多善根を明らかにしている。³⁷

さらに法然上人は「襄陽の石刻の阿弥陀經」に「專持二名号」以レ称レ名故諸罪消滅即是多善根福德因縁」と、二十一字多い『阿弥陀經』のあることを指摘して、念仏の勝善根を強調するのが、この第十三章である。³⁸

第十四章（六方諸仏唯証誠念仏篇）は、『阿弥陀經』に六方恒沙の諸仏が念仏の教えをまこと眞実であると証誠している文にもとづき、善導の『観念法門』、『往生礼讃』、『観經疏』（散善義）、『法事讃』、さらに法照の『五会法事讃』³⁹の解釈を示して、六方の諸仏のただ念仏の一行を証誠したまうことを明らかにしている。これが第十四章である。

第十五章（六方諸仏護念篇）は、称名念仏するものには六方の諸仏が護念し影護して、身も心もやすらかに安樂をえせしめられるという、念仏の現世における利益を明らかにしている。その内容は善導の『観念法門』に、

また『阿弥陀經』に説くがごとき、もし男子女人有つて、七日七夜および一生を尽して、一心に専ら阿弥陀仏を念じて往生を願ずれば、この人常に六方恒河沙等の仏、ともに来

つて護念したまうことを得るが故に『護念經』と名づく。
『護念經』という意は、また諸惡鬼神をして便を得せしめず。また横病横死、横に厄難有ること無く、一切の災障、自然に消散す。不至心を除く⁽⁴⁾。

とあり、また『往生礼讃』に、

もし仏を称して往生する者は、常に六万恒河沙等の諸仏の爲に護念せらるるが故に『護念經』と名づく。今すでにこの増上の誓願の憑むべき有り。諸の仏子等、何ぞ意を勵まして去らざるや⁽⁴⁾。

とある解釈によつて、法然上人は念仏するものの六方の諸仏の護念・影護を明らかにしている。これが第十五章である。

第十六章（以「弥陀名号」付「属舍利弗篇」）は、引文として、『阿弥陀經』に云わく、仏この『經』を説きて已りたまうに、舍利弗および諸の比丘、一切世間の天人阿修羅等、仏の所説を聞いて歡喜信受し、礼を作して去りぬ。善導の『法事讃』に、この文を釈して云く、世尊説法の時まさに了らんとす。慇懃の弥陀の名を付属したまう。五濁増の時、疑謗多く、道俗相い嫌つて聞くことを用いず。修行するごと有るを見ては、瞋毒を起し、方便破壊して競つて怨を生ず。かくのごときの生盲闍提の輩、頓敎を毀滅して永く沈淪せん。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離れ

ることを得べからず。大衆同心に、皆所有る破法罪の因縁を懺悔せよ⁽⁴⁾。

この『阿弥陀經』の最後の文と善導の『法事讃』における解釈をあげている。しかし法然上人の私釈はこの引文にかかわりなく展開される。それは以下五つの項目で明らかにしている。

一つは、八種の選択である。それは三經（無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經）の説相はそれぞれ異つても、一貫して念仏の一行を選択することにあつたとする。三經一徹の語にあらわされる。同時にそれは、三仏（釈迦牟尼仏・阿弥陀仏・諸仏）の聖意は一貫して念仏の一行を選択するにあつたとする。三仏一致の語にあらわされる。つまり八種の選択は、理論的に三經・三仏一貫して念仏の一行を選択するにあつたといひ表わす内容といえる。

二つは、略選択である。八種の選択として見出した、『選択集』の理論的結論は、その上は実践を求めるほかにない。それは「速やかに生死を離れんと欲せば」という主体的自覚に立つて、二種勝法・正雜二行・正助二業の三つの選択行為を求めるものであり、それは『選択集』の実践的結論といつてよいであろう。

三つは偏依善導一師である。法然上人は善導の『觀經疏』（散善義）の文に出会つて浄土開宗をとげたのであるが、その

後の法然上人の姿勢は「偏に善導一師に依る」という立場を表明する。それは善導が「浄土を宗とする人」であり、「三昧発得の人」であるからである。その「三昧発得の人」の撰述である『観経疏』は勿論のこと、三昧発得の人のことば（三昧正受の語）に、全幅の信頼をもち疑う余地のないことを表明するのである。

四つは、善導の『観経疏』撰述の立場である。善導の『観経疏』の終りには自らその撰述時の様子を記している。それを法然上人は『選択集』の終りに再記しているのである。それは『観経疏』はたんなる観経の註釈書ではなく、三昧定中の撰述（証定疏）であり、法然上人をして弥陀の直説とまでいい表わすに及んだ。善導自らは「もっぱら経法のごとくせよ」「一句一字加減すべからず」とまでいうのである。この善導の記述をそのままに法然上人が記している意味を看過してはならない。

五つは、善導の『観経疏』撰述の記事をそのまま『選択集』の終りに記しているのは、何を意味しているかということである。それは法然上人の『選択集』撰述の立場が善導の『観経疏』の撰述の立場と同じ三昧定中であつたことが指摘できるのである。法然上人の『選択集』撰述の前後時は三昧発得という宗教経験を得ている。ここに仏・善導・法然の同格論、さらには仏典・観経疏・選択集の等同論が示唆されているとみて間違いは

なからう。⁽⁴³⁾

〔註〕

- (1) 浄土宗聖典三の一九〇頁。
- (2) 浄土宗聖典三の二八五頁。
- (3) 浄土宗全書九卷三四頁。
- (4) 浄土宗全書九卷三三六頁。
- (5) 浄土宗全書九卷三六九頁。
- (6) 『弥陀経義・「弥陀義」という書名は、『観経疏』（定善義）のなかに出てくる（浄土宗聖典二の二五四、二五八頁）。『弥陀経義』百巻とも伝えられている。おそらくは『無量寿経』の註釈書であろう。
- (7) 浄土宗全書四卷二二八頁。
- (8) 『新修往生伝』（続浄土宗全書一六の九一頁）。
- (9) 中国西安市の西北太学校内において、太平坊の實際寺の跡が発掘されており、近年、壁画（浄土変相）の断片や實際寺の寺名の記された石片が出ている。拙稿『日中浄土』六号の「『あいさつ——中国仏教の動き——』（五頁）参照。
- (10) 大正大藏経五〇卷五九三頁下。
『続高僧伝』一七の原文はつぎの通りである。
近有「山僧善導者。周「遊震寓」求「訪道津」。行至「西河」遇「道綽部」。惟行「念佛彌陀淨業」。既入「京師」廣行「此化」。寫「彌陀經數萬卷」。士女奉者其數無量。時在「光明寺」説法。有「人告」導曰。今念佛名定生「淨土」。導曰。念佛定生。其人禮拜訖。口誦「南無阿彌陀佛」聲聲相次出「光明寺門」。上「柳樹表」。合掌西望。倒投身下。至「地」遂死。事聞「臺省」（大正大藏経五〇の六八四頁上）。
- (11) 浄土宗全書一〇卷一三四頁。

- (12) 浄土宗聖典二の三二五頁。
- (13) 浄土宗聖典二の三二五～六頁。
- (14) 浄土宗聖典二の三二六～七頁。
- (15) 浄土宗聖典三の一八九～一九〇頁。
- (16) 塚本善隆著作集四『中国仏敎史研究』一八四頁。
- (17) 聖聰(増上寺開山)の『当麻曼陀羅疏』に指摘されているものであるが、これを望月信亨博士が『当麻寺所伝の観経曼陀羅』―『仏敎史の諸研究』所収―で明らかにした。
- (18) 井上光貞著『日本浄土敎成立史の研究』四六頁。
- (19) 大谷旭雄稿「善導『観経疏』流传考」(『善導大師の思想とその影響』二五～七二頁)を参照されたい。
- (20) 浄土宗全書四卷三五六頁。
- (21) 浄土宗聖典三の一〇八頁。
- (22) 浄土宗聖典三の一二二頁。
- (23) 浄土宗聖典三の一二三頁。
- (24) 浄土宗聖典三の一二三～四頁。
- (25) 浄土宗聖典三の二二八頁。
- (26) 浄土宗聖典三の二二三頁～四頁。
- (27) 浄土宗聖典三の二二〇頁。
- (28) 浄土宗聖典三の二三三頁。
- (29) 浄土宗聖典三の二三五頁。
- (30) 浄土宗聖典三の二六六～七頁。
- (31) 浄土宗聖典三の二九一～五一頁。
- (32) 浄土宗聖典三の二五一頁。
- (33) 浄土宗聖典三の二五四頁。
- (34) 浄土宗聖典三の二五八頁。
- (35) 浄土宗聖典三の二六五頁。

- (36) 浄土宗聖典三の一七四～五頁。
- (37) 浄土宗聖典三の一七五～六頁。
- (38) 浄土宗聖典三の一七六～七頁。
- (39) 浄土宗聖典三の一七七～九頁。
- (40) 浄土宗聖典三の一八〇頁。
- (41) 浄土宗聖典三の一八一頁。
- (42) 浄土宗聖典三の一八二～三頁。
- (43) 拙稿「選択集・第十六章段について」(『佛敎文化研究』第四十二・四十三合併号所収)を参照されたい。